

南アフリカ 旅紀行
 <③ビクトリアの滝とその周辺>

石田 肇

9/12(木)～9/21(土)の10日間、家内と南アフリカの3ヶ国を廻るツアーに行ってきた。第3回目の旅紀行として、ジンバブエ共和国とボツワナ共和国の国境に位置するビクトリアの滝の周辺の観光をしました。ホテルを出発すると1時間ぐらいでボツワナとの国境があり、荷物を運ぶ大きなトラック(トレーラー)が何台も止まっており、通関の手続きをしていました。又現地の人も長い列を作っていました。我々は観光ビザを持っているので、国境もほとんど時間を掛ける事なく通りましたが、現地の人々や車は何時間もかかってこの国境を通過するのだろうと気の毒になりました。国境の事務所を抜けると大きな橋が架かっており、その中心が国境でした。道路とその横には鉄道も走っていました。日本では歩いて国境を越える経験をした事がないので、バスを降りて歩いて渡り貴重な体験をしました。

ビクトリアの滝はアフリカ東南部を流れるザンベジ川の中流部にある幅2km、落差108mの大瀑布でスコットランドの探検家ディヴィット・リヴィクストンが1855年に発見しまして、当時はイギリスの植民地でしたので、ビクトリア女王の名前を冠して、ビクトリアの滝と命名されました。

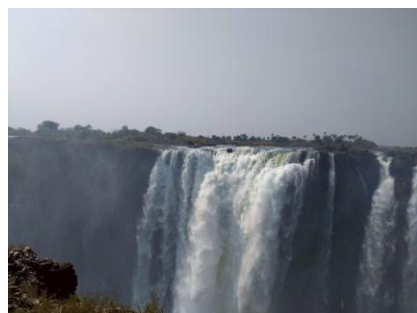
先ほどの国境の橋を渡ってすぐに、ボツワナ側から滝を見る事が出来るエリアの入口があり絶景を間近で観光しました。乾期のため水が少なく濡れずにすぐ近くまで行くことが出来ました。

昼食をビクトリアの滝の近くのレストランで取り、メニューの中にワニのお肉の料理があったので頼みました。固いイメージがあったのですが鳥のお肉のような感じで意外といけました。ホテルでの夕食にも出てきていましたが是も美味しかったです。午後から、国境を越えてジンバブエに戻りましたが、この時も大変でボツワナからジンバブエに行く人の超行列ができていて、最後尾に並ぶように言われましたが、ビザを持っていることを告げ、すり抜けて再入国の手続きをしました。ジンバブエ側からのほうが水量も多く大迫力の滝の景色を見ることが出来ました。

出発間際のバスの中から、滝の観光エリアの入口に、ロータリーマークを付けたゴミ箱を沢山発見しました。まさかと思っていたのでカメラを用意する間がなく残念でした。

次の日は空からビクトリアの滝を見る事にしまして、ヘリコプターのツアーに参加しました。空から見ると地上とは違い全体が見渡せ、すごい迫力でした。すぐそばにゴルフ場もありゴルフ好きの人はここでゴルフをすると気持ちが良いだろうと、ゴルフをしない私でも思いました。

今回の旅行は普段なかなか出来ないデンジャラス体験が出来た楽しい旅行でした。又行きたいと思っております。



CLUB WEEKLY No.2848

国際ロータリー会長
 ステファニー A. アーチック

会長 戸田 尊文

Rotary
 District 2660



未来に向けて原点回帰
 ～100年続くクラブ作り～



青少年奉仕月間

例会日：2025年5月22日
 (令和7年5月22日)

今日の例会

2025年5月22日

来週の例会

■ 5月29日(木)
 卓話 未定

- 本日の卓話
 卓話「東大阪の気になるNEWS」
 吉川 雄太 君

- 今日の歌「それでこそロータリー」



会長の時間

戸田会長

今月は、ロータリーの青少年奉仕月間です。この月間は、次代を担う若者たちにリーダーシップと奉仕の精神を育み、教育や国際交流の機会を提供し、自己肯定感を高めてもらうこと、そして差別や虐待のない、安全で前向きな環境を整えることを目的としています。その主旨に関連して、今日は「瞽女(ごぜ)さん」のお話をさせていただきます。

瞽女さんとは、視覚障害を持ちながら、三味線を弾き語り、各地を旅して芸を披露し、生計を立てていた女性たちのことを指します。瞽女さん「瞽(こ)」とは、「目の見えない人」を意味します。いわば、盲目の吟遊詩人であり、旅芸人でもありました。とくに有名なのは、新潟県上越市を拠点とした「高田瞽女(たかだごぜ)」です。この文化は江戸時代に広く発展し、長野や富山など、雪深い地域へも広がっていきました。起源をたどると、鎌倉時代の文献に盲目の語り手が登場しており、女性の瞽女が組織として整えられるのは江戸期以降と考えられています。当時、視覚障害を持つ人々は「働き手」と見なされず、家庭や社会から差別を受けることもありました。そうした中で、瞽女さんたちは芸を磨き、娯楽の乏しい村々を訪れては、歴史や人情話、民話、色恋の唄まで、多彩な物語を三味線に乗せて語り、人々に喜びと癒しを届けていました。

彼女たちは、三人一組で行動するのが基本でした。先頭には弱視の女性、後方に盲目の二人が続き、雪深い村々を巡っていました。旅をしていない間は「瞽女宿(ごぜやど)」と呼ばれる共同生活の場で、早朝に起床し、掃除と稽古を欠かさない、規律正しい生活を送っていました。この世界には厳格な戒律があり、男子禁制、恋愛禁止などが定められていました。

東大阪東ロータリークラブ

HP: <http://www.higashiosaka-eastrc.jp>

会 長: 戸田 尊文
 幹 事: 山崎 直人
 会報資料担当: 石田 肇

創 立: 昭和40(1965)年3月4日 例会場: ホテルセイリウ 例会: 毎週木曜日 12:30～
 事務局: 〒579-8012 東大阪市上石切町1-11-12 ホテルセイリウ302号室
 TEL072-985-0189 FAX072-985-0577 E-mail: higashiohrc@air.ocn.ne.jp

掟を破った者は「はぐれ瞽女」と呼ばれ、共同体から追放され、一人で旅をするしかありませんでした。

そんな過酷な世界に身を置きながらも、誇り高く芸に生きたひとりの女性が小林ハルさん、最後の高田瞽女として知られる人物です。

ハルさんは1900年、新潟県栃尾に生まれました。6歳で視力をほとんど失い、12歳で瞽女に弟子入ります。喉が潰れるほど歌の稽古を積み、雪の中を歩き、村々を巡って一人前の瞽女となりました。あるとき、彼女は幼い子どもを引き取り、共に旅をしました。しかし、その子は病に倒れて亡くなってしまいます。その悲しみの中で、ハルさんは、自分をこの世界に送り出した厳しかった母の気持ちを、初めて理解したと語っています。昭和40年代に入り、民俗学の高まりやマスコミの注目により、忘れ去られかけていた瞽女文化が再び脚光を浴びました。ハルさんはテレビや新聞で取り上げられ、「最後の瞽女」として全国的に知られるようになります。晩年は老人ホームで静かに暮らしながら、なお芸を伝え続けました。皇太子・同妃殿下(現在の天皇・皇后両陛下)がハルさんの施設に訪ねられることもありました。その生き様は多くの人々に感銘を与え、映画や書籍でも紹介されています。晩年、ハルさんは、「私は目が見えないけれど、見える人よりも多くのものを見てきたよ。」と言っておられたそうです。目が見えないからこそ見えるもの、ハルさんは過酷な人生の中で物の本質、人の本質をたくさん見てきたのだと思います。それでもハルさんはこうも言うておられました。「生まれ変わったら虫になってもいいから、目の見える人生を生きてみたい」と。

小林ハルさんは、唄うことを生業とし、唄を通して多くの人を癒やし、励まし、そして励まされながら生きました。

その生き様は、たとえ時代が変わろうとも、私達そして若者たちにとっても素晴らしい人生訓です。目に見えることだけがすべてではない。見えないものの中にこそ、本質がある。

小林ハルさんの人生を知る事で、改めてその大切さを再認識した次第です。



幹事報告

山崎幹事

《これからの予定》

- 【1】 5/24(土)地区会員増強セミナー
(一由会長エレクト、吉川(雄)次年度会員増強・職業分類委員長出席)
- 【2】 5/27(火)衛星クラブ例会 19:00~
- 【3】 5/30(金)IM第1組EXPOフェスタ
(大橋ガバナー、吉崎地区代表幹事出席)
- 【4】 5/31(土)~6/1(日)春の家族会
《連絡事項》
- 【1】 先般よりご協力をお願いしております、ロータリー財団「恒久基金」のご寄付を今月中によりしくお願いいたします。

IM第4組新旧会長・幹事会(金輪会)
2025年5月16日(金)
於:シェラトン都ホテル大阪



出席報告

5月15日

(5/15)の出席者数:25名(0)

5/15 出席率:53.19%

※()内数字は出席免除会員の出席者数
会員:54名(免除7名)

	4/24	5/1	5/8
HC出席	28(0)名	休会	24(0)名
MU出席	3(0)名		3(0)名
修正出席率	67.39%		57.45%